校長室だより～燦燦～ №２３９

国語の貯金

2020.11.25

教員１年目に小学３年生の担任となった。国語の授業は毎日あった。教育実習の経験があるとはいえ、自分の授業のダメさ加減は自覚していた。にもかかわらずである。国語の時間に、私が子どもたちに発問らしきものをする。すると、子どもたちの反応がいい。話す内容もすばらしい。自分の発問がいいのか。自分の授業がすばらしいのかと勘違いしてしまいそうなくらいである。

職員室で、このことを先生方に話した。私の疑問は解決した。私が新採用教員として赴任した玉川第一小学校は、前年度に福島県小学校教育研究会（小教研）の県大会国語部会の会場校であり、県内の先生方に国語の授業を公開した学校だったのである。それまでの数年間をかけて国語の研究をしてきた学校でもあった。

私が担当した小学３年生は、入学したときから鍛えられてきた子どもたちだったのである。どうりで他の先生方の授業を参観させていただいてもすばらしいわけである。力量のある先生方だった。子どもたちに力がつくと、私のように大したことがない教員が授業をやっても、それなりになるということがわかった。

しかしである。私は、２年間の貯金を夏休みまでに使い果たしてしまった。子どもたちが変わっていくのは早かった。日々、子どもたちがだめになっていくのはわかっているのだが、力不足の私にはどうすることもできなかった。それでも「これはまずい」という思いから、日曜日には郡山の東北書店の２階に通った。そこには、教育書が所狭しと並んでいた。私はすがる思いで本を探した。

だが、教育に特効薬も万能薬もない。私の国語の授業は変わらなかった。あの当時、子どもたちはどう思っていたのだろうか。私は、申し訳ない気持ちもあって、子どもたちと一生懸命遊んでいたのかもしれない。

玉川第一小学校には、県大会の名残だろうか。国語の時案というものがあった。毎時間の国語の授業の計画案を提出するのである。これが私にとっては地獄であった。国語の授業は毎日あったのである。事前にちゃんと作成してから授業に臨めば意義のあるものとなるが、私の場合は、追いつかなくなり、授業が終わってから時案を作成する始末であった。本末転倒である。もはや形だけの取組となっていた。

先輩の先生方はというと、夏休み中に、２学期分の時案をすべて作成してしまっている方もいた。計画的な営みとしかいいようがない。私とは雲泥の差だった。あの頃の私は、国語の授業が嫌いになっていった。悲しいことに私の教員免許は国語だった。その一方で、算数や体育はやりやすかったし、好きだった。

今でも、教員１年目、１学期の国語の授業は忘れられない。いいものがどんどんだめになっていく。崩れていく。力のある子どもたちに教員の力量がついていかない。授業は恐ろしいものであることを思い知らされた。教員に指導力がなければ、授業力がなければ、子どもは不幸になる。

本気で焦った私は、夏休みも本を読み漁った。２学期からは、国語の授業を少しでもましにするために。子どもたちの目の輝きが失われないうちに。